

(3) 地域の民俗芸能の継承にみる歴史的風致

はじめに

沖縄の民俗芸能は、日本本土や中国、その他東南アジア諸国の文化的影響を受けながら成立し、長年にわたって演じ継がれる中で、地域ごとの特色を備えるようになったものとされている。北中城村の芸能も、こうした諸文化の影響を背景に成立し、各集落の歴史や暮らしと結びつきながら受け継がれてきたと考えられている。



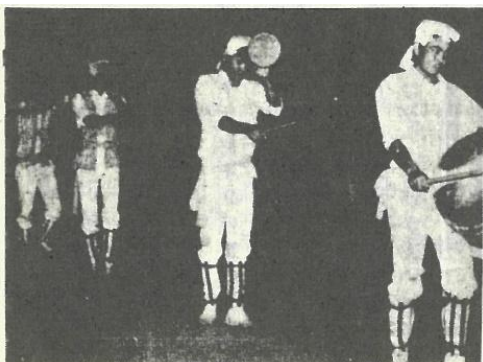
出典：平成16年北中城村青年エイサーまつり（村ホームページ）

各集落の年中行事の一環として執り行われてきた芸能は、それぞれの集落の聖地などを

舞台に、祖先の崇拜や五穀豊穡、子孫繁栄などを祈願する目的で、多様な形で親しまれてきた。これらの芸能のうち、エイサーは、沖縄全域で広く演じられている代表的な芸能の一つであり、地域ごとに独自の型が受け継がれている。

旧盆（太陰暦における旧盆）の夜に、太鼓や三味線の音を響かせながら踊り手たちが集落内を練り歩く「道ジュネー」では、地域の歴史的な景観を舞台として展開される独特の活動として、地域固有の風情を生み出してきた。

今日でも、毎年旧盆の時期には、村内各地の集落でエイサーの隊列が道ジュネーを行い、集落の空間に賑わいと躍動感をもたらしている。戦後は、周辺地域の華やかな踊り方を取り入れた現代風のエイサーを披露する集落も増えてきた。村内最大規模の祭りである「北中城まつり」に合わせて、各青年会が参加する「北中城村青年エイサーまつり」も、昭和49年(1974)から継続的に開催されている。また、村内の各集落においては、比嘉地区を除くほぼ全ての地区で集落単位のエイサーが継承されている。以下に安谷屋、熱田、喜舎場のエイサーについて詳細を示す。



出典：村民の友（昭和50年9月） 第二回村青年エイサー祭り

■安谷屋のエイサーに関する建造物・活動の詳細

a) 安谷屋の建造物等

<安谷屋のエイサーにおいて歴史的風致を形成する建造物>

●根所火の神（再掲）

安谷屋グスク南東側の麓に所在する琉球石灰岩のほこら祠。

康熙52年(1713)成立の『由来記』には、安谷屋村の拝所として「中之根ドゥクル所」という記録があり、これが現在の根所火の神ニードゥクルヒヌカンに相当するとされている。

安谷屋のエイサーにおいて直接拝されることはないが、道ジュネーが通る県道146号線沿いに位置しており、通りの賑わいを感じ取ることができる。



■根所火の神 外観

●安谷屋グスク(再掲)

安谷屋地区に所在する遺跡で、集落北側の丘陵上に位置する。康熙52年(1713)成立の『由来記』においては、グスク内の拝所が「安谷屋城嶽グスクダキ」として記録されている。



安谷屋のエイサーにおいて直接関わることはないが、道ジュネーが通る県道146号線沿いに位置しており、通りの賑わいを感じ取ることができる。



■安谷屋グスク 全景

<安谷屋のエイサーに関連するその他の建造物>

本計画において、「安谷屋のエイサーの歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して記載する。

建造物名		概要
ナニカカミヤニ 仲の神屋		安谷屋地区に所在する旧家で、集落の草分けである「仲」の神屋（祖霊や火の神などを祀った建物）。正確な建築・建替年代は不詳。 安谷屋のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。
安谷屋のおもろの碑		安谷屋に所在する歌碑で、平成12年(2000)に建立された。 安谷屋のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。

b) 安谷屋の活動

沖縄の各地で広く親しまれている芸能であるエイサーは、毎年旧盆の時期に青年会を中心として披露される村落祭祀である。旧盆に帰ってくる祖先の霊を供養するために踊られるとされ、地域によって披露される日取りは異なるが、一般的には祖霊を送り出す「ウークイ」の日に踊られる地域が多い。現在の安谷屋地区では、祖霊が帰ってきた翌日にあたる「ナカビ」と、送りの日の「ウークイ」の二日間に分けて行われている。

安谷屋の集落でいつ頃からエイサーが行われてきたのか正確な歴史は定かではないが、古くは大正時代より前とも伝えられている。地域住民が所蔵していた昭和37年(1962)頃のものとしてされる写真には、安谷屋エイサーが集落内を練り歩く道ジュネーの様子や、広場に集まったエイサーの衣装姿の青年たちの様子が残されている。また、昭和49年(1974)9月の村広報誌『村民の友』には、北中城村連合会主催の第1回エイサー祭りに安谷屋青年会が参加した記述が認められる。

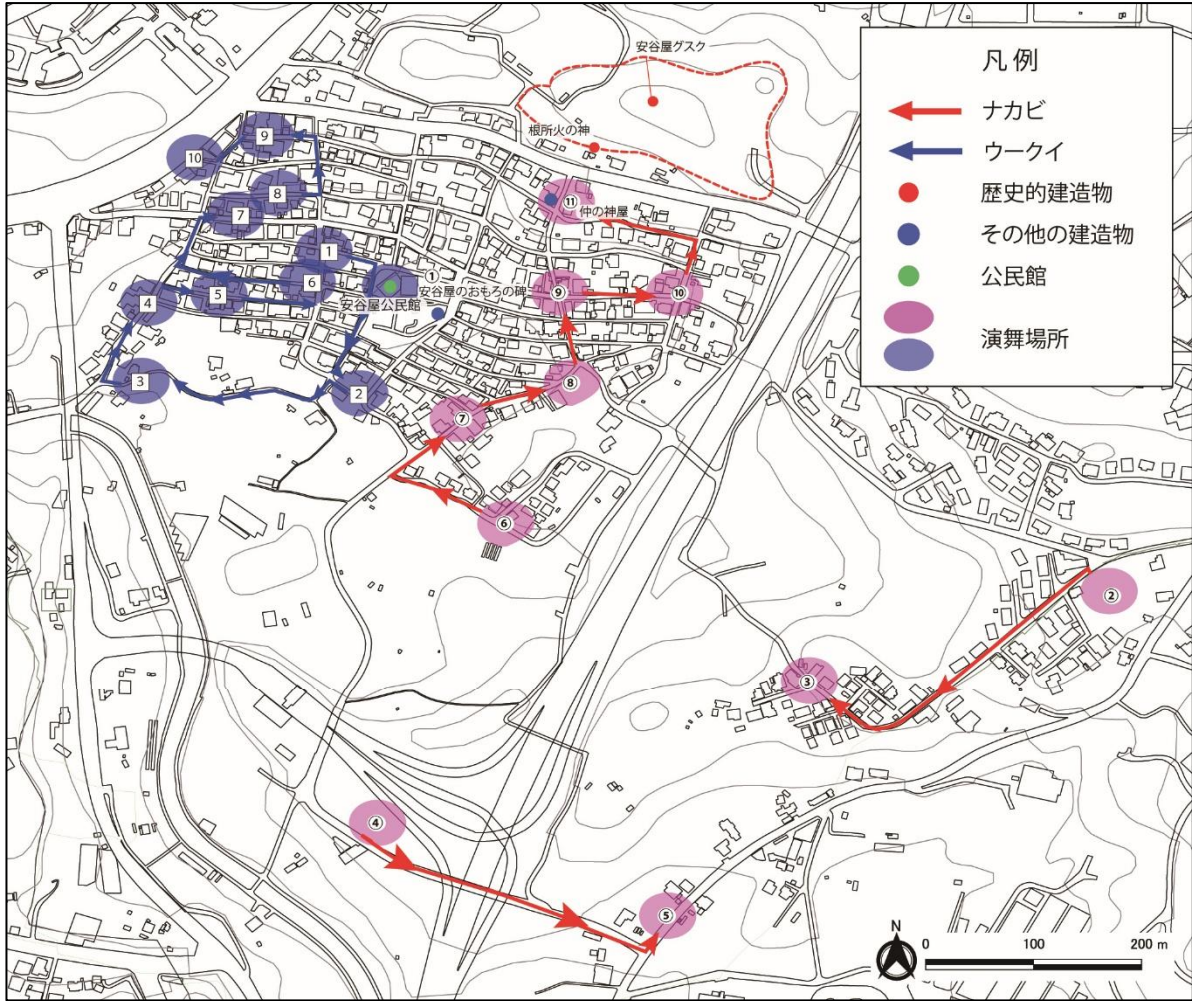
『村史民俗編』(平成8年(1996))によると、安谷屋のエイサーは2日間に分けて行われたが、現在とは異なり、祖霊を送る「ウークイ」の日の夜半から夜明けまで青年男女が練り歩き、近隣集落まで遠征したとされている。更に「ウークイ」の翌日には、獅子を先頭に集落内の拝所を練り歩き、最後は公民館前の広場で本番の舞踊が行われたという。

現在もエイサーは2日間に分けて行われるが、演舞は集落内にとどまり、「ナカビ」の日は公民館前広場を出発点に集落の東側各所(十一か所)を練り歩き、最後に仲の神屋(祖霊や火の神などを祀った建物)で行進を終える。「ウークイ」の日は集落の西側各所(十か所)を練り歩く。一般的には太鼓中心の早いテンポのエイサーが多い中、安谷屋のエイサーはゆったりとした曲調の古風な振りの特徴としている。旧盆の時期には、男女それぞれで揃いの衣装を着けた踊り手たちが、太鼓を打ち付ける音や掛け声を上げながら集落内の家々や拝所を練り歩き、沿道ではそれを見守る地域の住民たちの姿がみられ、集落全体が一体となった賑わいが感じられる。



■昭和37年(1962)のものとしてされる安谷屋エイサーの様子

■安谷屋エイサーの道ジュネーの順路



■熱田のエイサーに関する建造物・活動の詳細

a) 熱田の建造物等

<熱田のエイサーにおいて歴史的風致を形成する建造物>

●^{シマニドゥン}島根殿


熱田地区のほぼ中央、熱田公民館の敷地内に位置する拝所である。島根殿は大きな岩を背にして本殿があり、その前に拝殿がある。以前は石の祠のみであったが、『村史民俗編』（平成8年(1996)）によると、昭和15年(1940)の「紀元2600年記念」の際に鉄筋コンクリート造に建て替えられ、神社様式の拝所となったとされる。また、建て替え時に字内に点在する神々を本殿に合祀したという。本殿の形式は一間社流造であり、拝殿は入母屋造、平入の木造赤瓦本瓦葺で軸部は戦前のものとされる。



熱田のエイサーにおいて、道ジュネーの順路内に位置し、その賑わいを感じ取ることができる。

<熱田のエイサーに関連するその他の建造物>

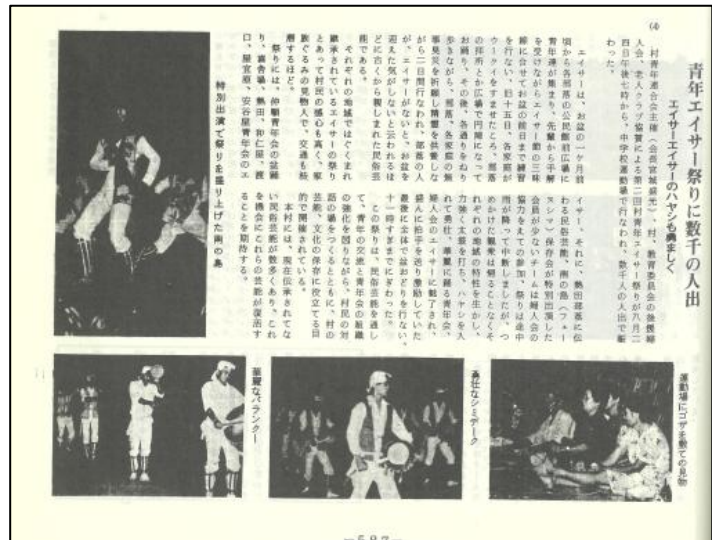
本計画において、「熱田のエイサーの歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して記載する。

建造物名		概要
ンブガー		熱田に所在するカー（井泉）。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。
アガリユーヌ ウトゥーシ		熱田に所在する拝所。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。
ナカジョー 仲門		熱田に所在する拝所で、熱田の中で最も大きな門中の一つである仲門の祖霊などを祀った建物。正確な建築・建替年代は不詳。 熱田のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。

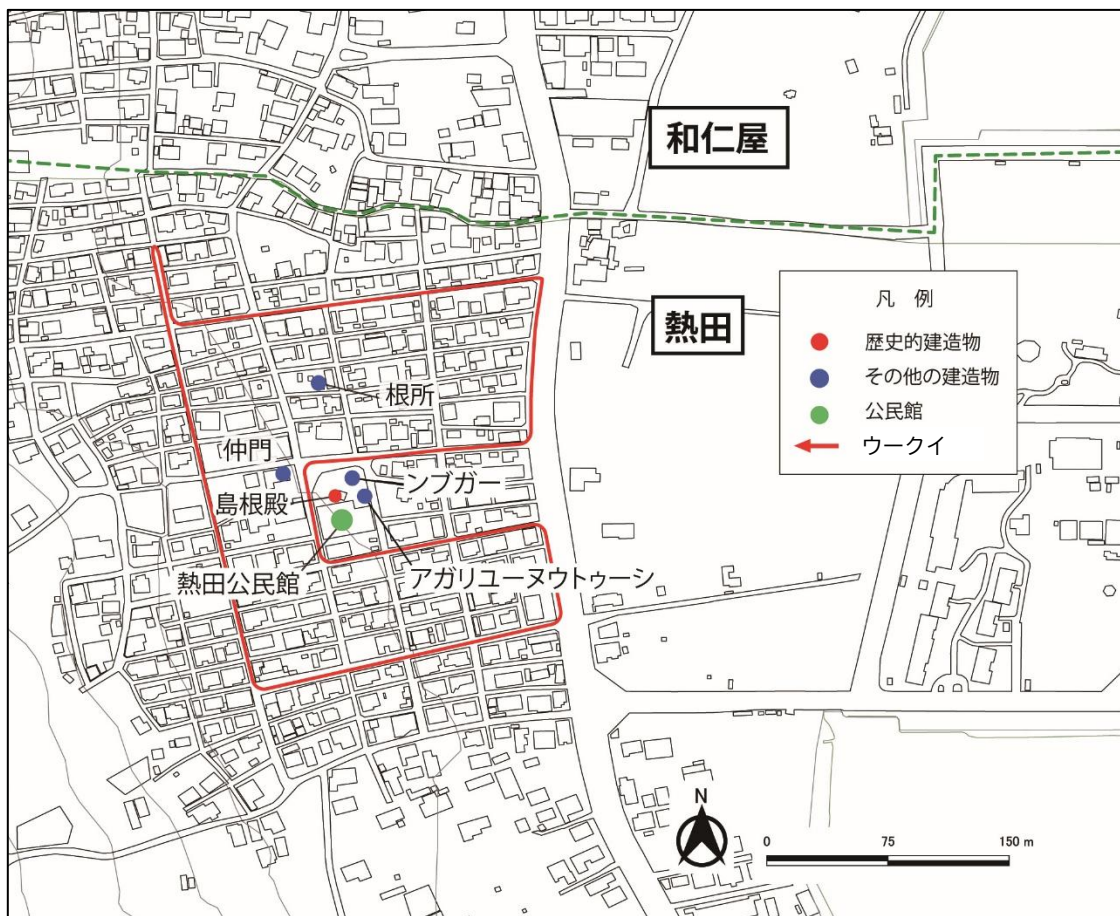
b) 熱田の活動

熱田のエイサーがいつ頃から行われてきたかについて、正確な成立時期は定かではないが、昭和50年(1975)9月の村広報誌『村民の友』には、北中城村連合会主催の青年エイサー祭りに熱田青年会が参加したことが記されており、少なくとも昭和50年以前には地域の青年会活動としてエイサーが行われていたことがうかがえる。

『村史民俗編』(平成8年(1996)発行)によると、熱田のエイサーは祖霊を送る「ウークイ」の日に、まず島根殿を拝礼した後、旗頭を先頭に旧家を廻り、最後は再び島根殿に戻って夜遅くまで踊り明かしたとされる。



■『村民の友』昭和50年9月号の青年エイサー祭りについての記事



現在の旧盆の道ジュネーでは、住宅地を中心に巡行する形式となっており、拝所での奉納エイサーは行われていないものの、同時期に開催する自治会主催のエイサー祭りにおいて、島根殿や仲門といった拝所を巡る奉納エイサーを実施している。熱田のエイサーは、パーランクー（片面に皮を張った手持ち用の小型太鼓）を主体とした華やかなバチまわしを特徴とし、青年会に加えて婦人会や子ども会などの地域住民も参加する祭りの中で、集落全体に賑わいをもたらしている。

■喜舎場のエイサーに関する建造物・活動の詳細

a) 喜舎場の建造物等

<喜舎場のエイサーにおいて歴史的風致を形成する建造物>

●喜舎場公の墓

村の創建者といわれている喜舎場公の墓で、喜舎場地区北西部に所在する。喜舎場公園後方、丘陵斜面の中腹に位置し、琉球石灰岩の上に石を積み上げ、その上にコンクリートで造った笠塔婆かさとうぼ型の墓がある。墓に向かって右側に墓碑があり、表に「喜舎場公之墓 昭和十二年八月建設」と刻まれている。



墓前の香炉には「奉納 字喜舎場向上會」、墓の前方にある一対の灯籠に「奉納 昭和十二年八月吉日」と刻まれている。北中城村内の旧跡を調査した『北中城村歴史風致資産調査報告－旧跡－』（以下、『－旧跡－』）によると、喜舎場公の墓は一時荒廃したが、昭和12年(1937)に集落をあげて補修されたという。

喜舎場のエイサーにおいては直接拝されることはないが、祖霊を送る「ウークイ」の日に隊列が始まる喜舎場公園の背後に位置し、巡行の賑わいや演舞の掛け声が喜舎場公の墓を望む丘陵一帯に響き渡る。

<喜舎場のエイサーに関連するその他の建造物>

本計画において、「喜舎場のエイサーの歴史的風致」の形成を担っている建造物として位置付けてはいないものの、北中城村らしい歴史的景観を形成する建造物等を抜粋して以下に記載する。

地区	建造物名		概要
喜舎場	トコノ殿		喜舎場に所在する拝所。元々は同敷地の別の場所にあったが、昭和53年(1978)の公園整備に際して移設・建替がなされた。 喜舎場のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。
	喜舎場の石獅子		喜舎場に所在する琉球石灰岩で作られたインジューサー（石獅子）で、元は集落内の別の場所にあったが、昭和58年(1983)に現在地に移設された。 喜舎場のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。
	喜舎場のウフカー		喜舎場に所在するカー（井泉）。正確な建築・建替年代は不詳。 喜舎場のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。
	カーグワー（セントクガー）		喜舎場に所在するカー（井泉）。正確な建築・建替年代は不詳。 喜舎場のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。
	おもろの碑		喜舎場に所在する歌碑で、平成11年(1999)に建立された。 喜舎場のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。
	仲間 ^{ニドツクル} 根所		喜舎場に所在する旧家で、喜舎場村の創建者と伝えられる喜舎場公の直系に連なるといわれており、集落の発祥に関わる最も古い家の一つである。現在は敷地の一角に、自治会によって祖霊や火の神を祀る建物・神屋が設けられ、そこで祭祀が執り行われているが、正確な建築年代は不詳。 喜舎場のエイサーにおいて道ジュネーの賑わいを感じ取ることができる。

b) 喜舎場の活動

喜舎場のエイサーは、戦前から行われていたと伝えられている。喜舎場公民館には、昭和35年(1960)に公民館前で撮影されたとき、エイサーの装束に身を包んだ青年や女性たちの写真が残されており、当時から青年層を中心に地域の人々が多く参加していた様子がうかがえる。

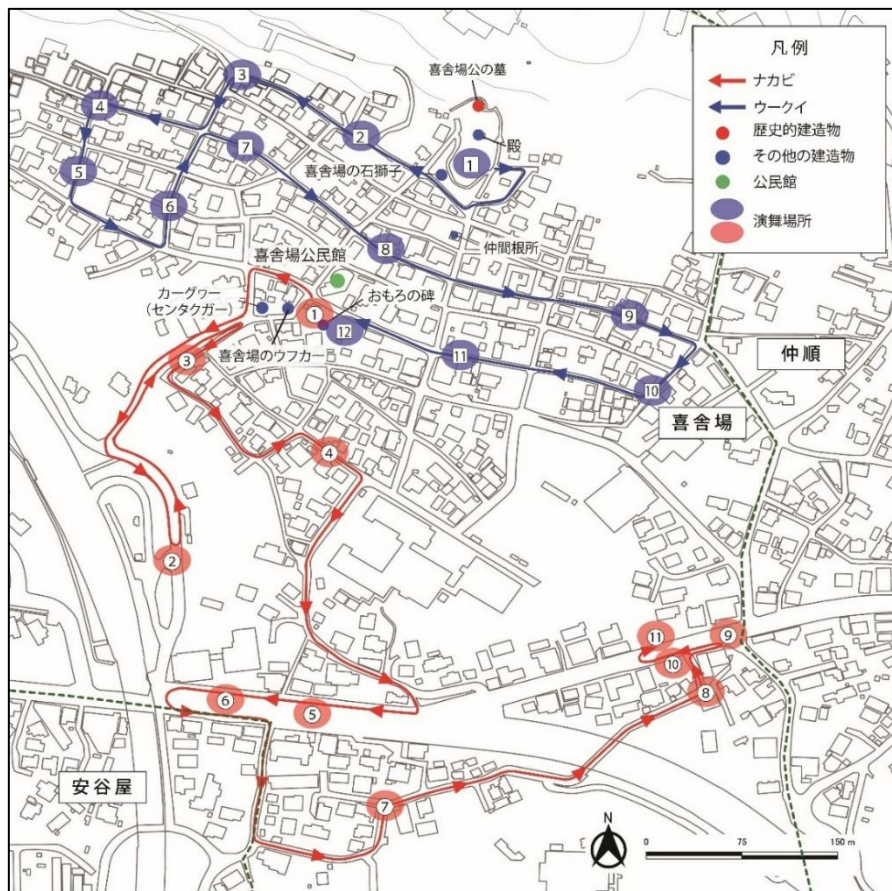


■昭和35年撮影の青年会の様子

喜舎場のエイサーは、戦後しばらくの間途絶えていたものの、沖縄県嘉手納町の「千原エイサー」に学び、空手の型を取り入れた切れのある力強い演舞を特徴として再興された。

旧盆においては、祖霊が帰ってきた翌日にあたる「ナカビ」と、祖霊を送る「ウークイ」の二日間に分けて道ジュネーを行い、それぞれ異なるルートで集落全体を巡行している。

また、ウークイの日には、集落北部に位置し喜舎場公の墓を望む喜舎場公園内において獅子舞の演舞も行われ、集落全体に賑わいをもたらしている。



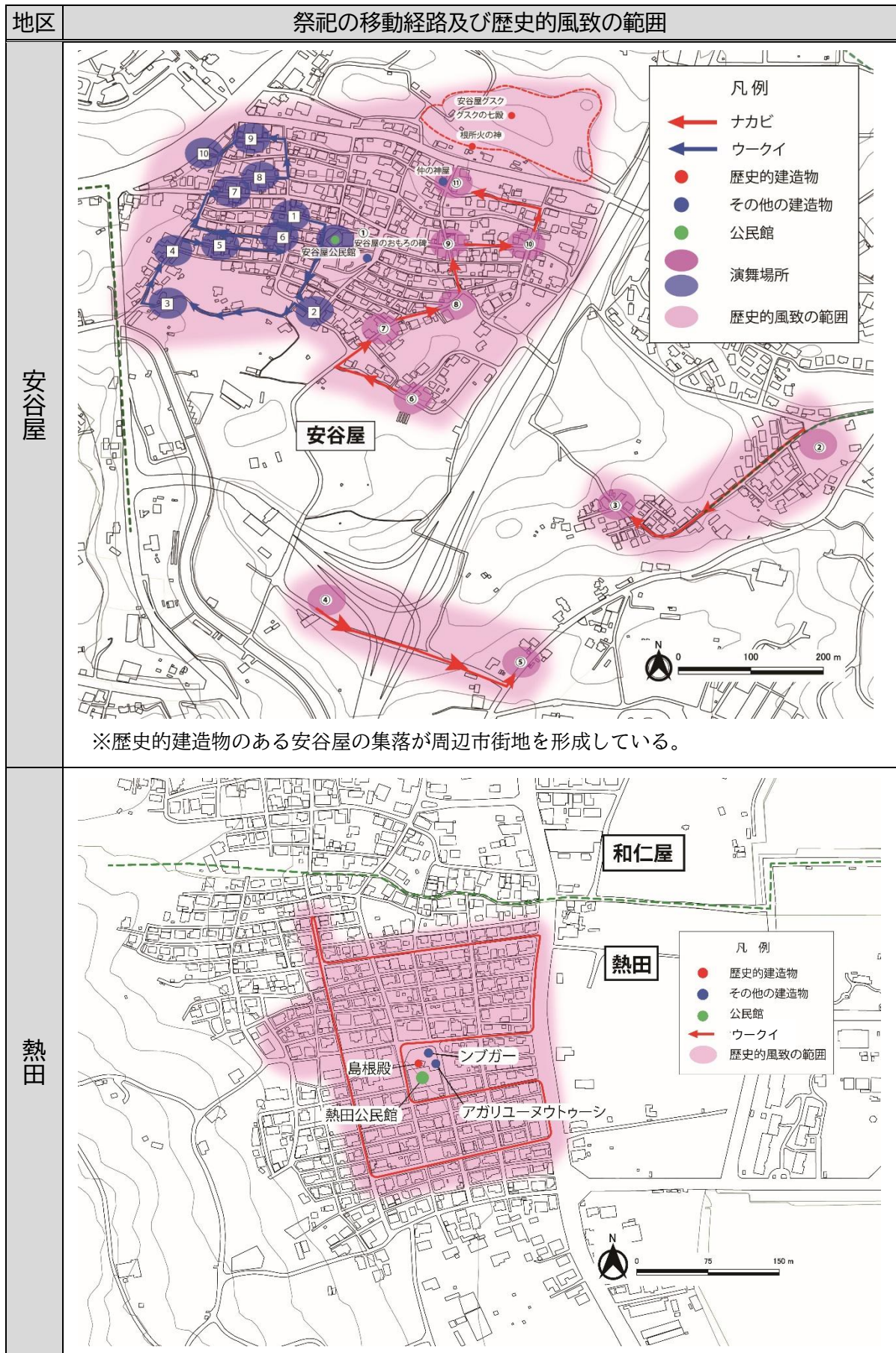
おわりに

北中城村におけるエイサーは、旧盆の時期に祖霊を迎え、送り出す行事と結びつきながら、各地域の拝所や生活空間を舞台に受け継がれてきた民俗芸能である。

青年会を中心とした地域住民により、道ジュネーや奉納エイサーとして集落内を巡行するエイサーは、旧家や拝所などの歴史的な空間と一体となって展開されてきた。

集落一帯で披露される演舞と太鼓の華やかな音色が歴史的な集落景観と重なり合う様子が、地域固有の歴史的風致を形成している。

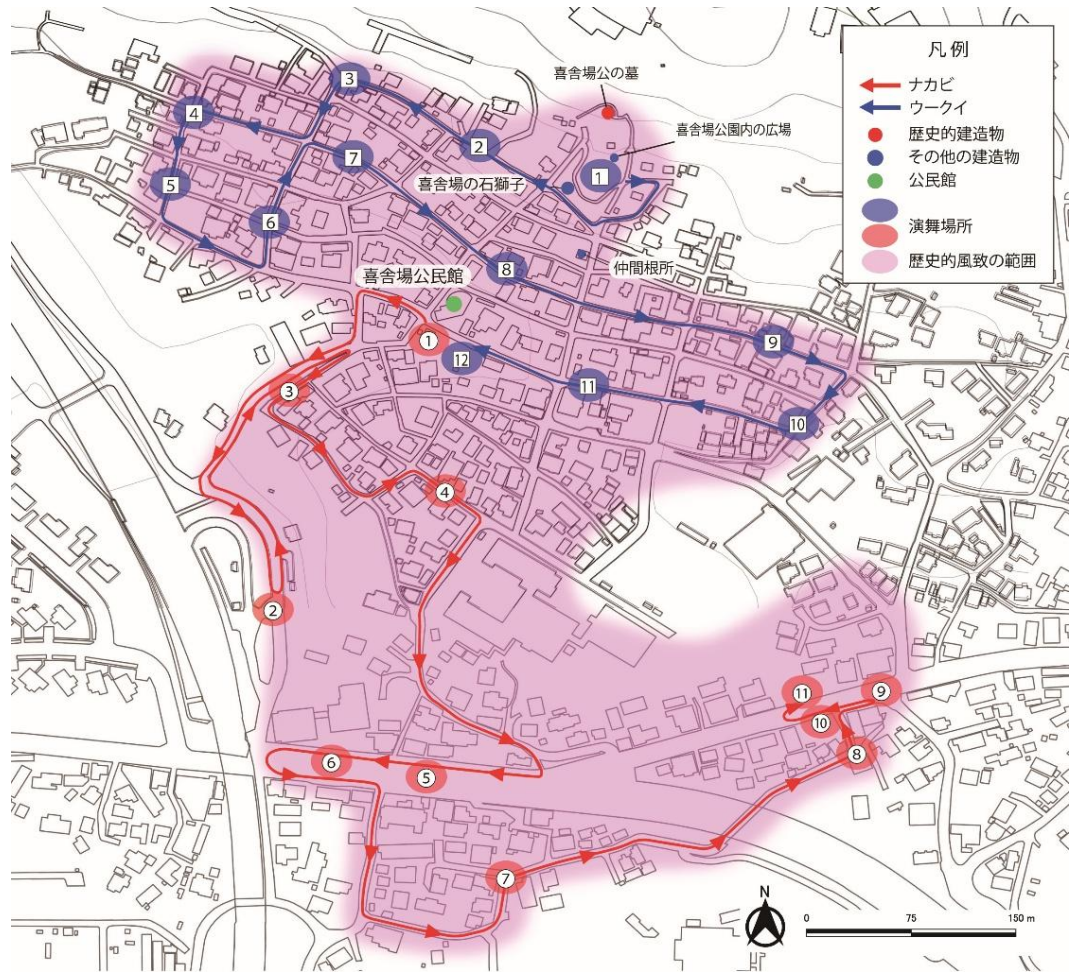
<各地域のエイサーの歴史的風致>



地区

祭祀の移動経路及び歴史的風致の範囲

喜舎場



◆地域の民俗芸能の継承にみる歴史的風致

